

平成28年度
宇都宮短期大学附属高等学校入学試験問題

国 語

注 意

- 1 監督者の「始め」の合図があるまでは、開いてはいけません。
- 2 試験時間は、板書されている時間割のと通りの50分間です。
- 3 問題数は大きな問題が4問で、表紙を除いて10ページです。〔四〕は記述問題です。
- 4 解答用紙は2枚で、答え方はマークシート方式と記述式です。
- 5 監督者の指示にしたがって、試験開始前に受験番号と氏名をマークシート解答用紙のきめられた欄に書き、さらに受験番号をマーク欄にマークしなさい。
- 6 監督者の指示にしたがって、試験開始前に受験番号と氏名を記述用解答用紙のきめられた欄に書き、さらにバーコードシールをきめられた枠の中に貼りなさい。
- 7 答えは、それぞれの解答用紙に記載されている注意事項にしたがって、ていねいに記入しなさい。
- 8 試験中に質問があれば、手をあげて監督者に聞きなさい。
- 9 監督者の「やめ」の合図があったら、すぐやめて、鉛筆をおきなさい。

—
次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ことばの誤解が生じるときには、誤解が生じるだけの物理的環境が整っていることが多い。実感をもつて直接知っているのであれば誤用に歯止めがかかるが、単に頭の中で概念として理解しているだけだと誤った想像や推論をしてしまい、まったく異なる解釈をしてしまうこともある。成句や慣用句、ことわざの類いで誤用が生じたり、別解釈が生じたりするのは、このような場合である。

「山道を登りながら、こう考えた」のあとに、「注智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。②意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい」と続くのは、夏目漱石の『草枕』の冒頭部である。

この中の「情に棹さす」とはどういう意味だろうか。もともとこういう言い回しがあるわけではなく、「流れに棹さす」という成句をもじってつくった表現である。感情を川の流れのように、一方向に一気に強く人を運び去るものと見立ててはじめて成立する表現だ。この「流れに棹さす」の意味が正確に理解されているかについて、文化庁の「国語に関する世論調査」は何度か取り上げている。いずれも誤解は六割を超え、正しく理解している人は二割を切っている。この結果を見て、日本語を正しく使えない人が増えていると嘆いたり、批判したりするのは簡単だが、これまで述べたとおり、誤解や誤用は、突発的に生じるのではなく、そういうものが生じる理由があるはずと考えなければならぬ。

「流れに棹さす」と聞いて、舟を操る船頭の動きを思い浮かべる

人は少数派だろう。

A 東京の隅田川にしても、江戸時代は、舟が重要な交通手段だったこともあり、漁をする舟やものを運ぶ舟とともに、多くの舟が行き交う場所だった。

B もう船頭さんが「流れに棹さす」ようすを見ることがない時代なのである。

C 今でも水上バスや屋形船はあるが、人力のみの舟はまずないだろう。

D なにしる船頭さんが操船している光景を見るのは、今では観光地の急流下りくらいで、しかも急流下りでは方向の操船は必要だが、流れに棹さすことはあまり多くないからである。

舟はなにもしなければ流れのままに流されていく。船頭は、長い竹の棹を使って川底を突き、進む方向を変えたりして舟を操った。流れに乗っているときに、舟の後ろにいる船頭が棹をさして川底を突けば、さらに速度が上がって勢いよく進むことになる。つまり、流れに乗っているだけで何もしなくても進む状況なのに、あえて棹をさして勢いよく進むようにするのが、「流れに棹さす」という動作であった。結果、しなくてもよいのに勢いをつけることになる。少しニュアンスは異なるが「**1**」行為に近いと考えてもいい

だろう。

私たちが世の中について知っている情報の総体を言語学では「世界知識」と呼んでいる。世界と言っても私たち一人一人を取り囲む世界のこと、「世界情勢」などと言うときの「世界」のことではない。江戸時代の人ならば、舟のことも船頭さんが操る棹のことも、またその使い方も常識的に知っていただろうが、現代人はその種のこととは詳しく知らないのが普通だ。つまり、江戸時代の人にとっては「流れに棹さす」動作がどういうもので、どういう結果を招くかなどが世界知識の中にあっただが、現代人の多くはその種の情報である。もちろん、このことは現代人がものを知らないということではなく、(a) 接したり目撃したりするかどうかの違いである。そして、さきほど述べたように、現実的に (b) 知っていたら、ことばの誤用や変化に対する歯止めになるが、(c) 頭の中で情報や知識を操作して推論するだけでは誤用や思わぬ変化につながる人が多いのである。

文化庁の調査の結果は、日本人の三分の二以上が「流れに棹さす」を「流れに逆らう」のように逆の意味に理解していることを示している。もちろん、正確で具体的な世界知識を持っているれば本来の意味に理解するはずなのだが、それを現代人に求めるのは難しい。知らないことについてはすでに知っている知識を動員して推論することしかできない。そして、「流れに対して働きかける動作だから流れを止めようとする」のだろうと考え、「流れのように動きのあるもの

に、棹といった細長いものをさす」のだから「動きを止める行為」と推論することになる。「そうだなあ。」という邪魔を深めたとしても責められない。

ことばの意味は辞書を引いて理解できる単純な意味もあるが、日常的に直接見聞する経験的知識をもとに深く理解すべき意味も多い。特に、比喩は、もとの動作がどう認識されていたかを直接知っていなければ、不正確な理解にずれていってしまうこともあり得る。「優秀な学生を青田買いする」「相手は感情的になって論争を挑んで来ているんだから、流れに棹さすようなまねはするなよ」の「青田買い」も「流れに棹さす」も (d) そういう行為をするのでなく、たとえである。現代に生きる私たちの周囲でそういう行為を見かけることはないから、あとは往時の人々がそういうことをするときどのような状況があっただのかを想像力を働かせて思い浮かべることができる。

(加藤重広「日本人も悩む日本語」から)

(注) 智に働けば角が立つ || 理屈っぽい言動によって人間関係が穏やかでなくなることを

問一 ① 誤解が生じるだけの物理的環境とあるが、その説明として最も適当なものはどれか。

ア 成句や慣用句、ことわざの類いなど、常識として知っているべき表現を正しく使えない人が増えているような状態

イ 過去には一般的だった物事が、現代では非日常的なものに変化してしまっているような状態

ウ 実際に見たり聞いたりしたことのない物事に対し、すでに知っている情報を寄せ集めて推論しているような状態

エ ことばの意味を辞書を引くだけで解釈し、満足してしまっているような状態

問二 ② 夏目漱石の『草枕』の冒頭部とあるが、これが引用された意図として適当なものはどれか。

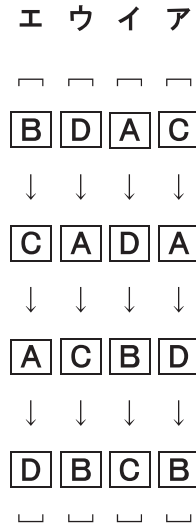
ア 名だたる文豪ですらことばの用い方を誤っている事実を取り上げることによって、ことばの誤用は珍しいことではないことを確認させるため

イ 「流れに棹さす」という慣用句の理解度が低いことに注目させることによって、ことばの誤用が生まれる背景を知ることが必要であるという筆者の考えにつなげるため

ウ 有名な作品の中にもことばの誤用例がそのまま残されていることを指摘することによって、いかに多くの読者がことばの意味に無関心であったかを示すため

エ 「流れに棹さす」を「情に棹さす」という言い回しに変えて用いた名文を挙げることによって、いかに夏目漱石が言葉に精通していたかを示すため

問三 本文中のAからDの文を正しい順序に並びかえたものはどれか。



問四 ① ② に入る語の組み合わせとして適当なものはどれか。

- | | | | | |
|---|----|------------|---|----------|
| ア | 「1 | 火に油を注ぐ | 2 | 水を差す |
| イ | 「1 | 木に竹を接ぐ | 2 | お茶を濁す |
| ウ | 「1 | 音頭をとる | 2 | 出る杭は打たれる |
| エ | 「1 | 藪をつついて蛇を出す | 2 | 釈迦に説法 |

問五 ③ 「世界知識」の例として適当でないものはどれか。

ア 毎日トラと接することで知り得たトラの生態

- イ 調理を通して体得したパスタ料理の味付け
- ウ インターネットの情報を通して予測する経済の今後
- エ 育児の中で気付いた赤ちゃんの寝るタイミング

問六 (a) から (d) に入る語の組み合わせとして適切なものはどれか。

- ア 「a 直接」 b 単に c 実際に d 日常的に
- イ 「a 単に」 b 実際に c 日常的に d 直接に
- ウ 「a 実際に」 b 日常的に c 直接に d 単に
- エ 「a 日常的に」 b 直接に c 単に d 実際に

問七 ^④ それ指しているものとして最も適切なものはどれか。

- ア 「流れに棹さす」に関する調査結果を真剣に受けとめ、ことばに対する理解を深めようとする
- イ 「流れに棹さす」動作がどういふもので、どういふ結果を招くかを体験的に知ること
- ウ 「流れに棹さす」動作が「流れに逆らう」動作だけではないことを体験的に知ること
- エ 「流れに棹さす」といふ慣用句から、逆にそのもとなつていふ動作を推測すること

問八 ^⑤ 現代に生きる私たちの周囲で……思い浮かべるしかない。とあるが、「青田買い」の本来の「状況」として適切なものはどれか。

- ア 悪天候などにより充分に実らなかった稲を、安いという理由だけで購入するような状況
- イ 稲に穂も出ていない状態で収穫を見込み、その田んぼから穫れる米の購入権利を買ってしまうような状況
- ウ 違法な売り買いに対する後ろめたさを感じながらも、米を買ってしまうような状況
- エ 収穫量を調整するために、成長前の稲を刈りとってしまうような状況

問九 本文の中で述べられている内容として適切なものはどれか。

- ア 比喩でたとえられている現象そのものを知らないことが、ことばの誤用を招く一因にもなってしまう。
- イ ものごとの実態を確かめようともせず、概念でしか把握していない人は、ことばを正しく使えない。
- ウ 現代人の「世界知識」は、江戸時代の人々の持っていたそれと比べて減少している。
- エ 辞書を引くだけでは、話者がそのことばに込めた特別な感情まで読み取ることができない。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「僕」の「母」は重い病の床に就いていた。小学校の一泊旅行が翌日に迫っていたものの、「母」の病状がおもわしくないので参加を取りやめてほしいと「姉」から言われる。

「お風呂、すぐ入る？それとも勉強がすんでから？」

姉には答えず、（ a ）して席を立った。母が悪いということと、母が死ぬかもしれないということは、僕の心で一つにはならなかった。級の誰彼との約束や計画が、あざやかに浮かんでくる。両の眼に、涙がいっぱい溢れてきた。

父の書斎の扉がなつかば開いたまま、廊下へ灯がもれている。そこを通過して、突き当りの階段を上ると、僕の勉強部屋があるのだが、ちやうどその階段を、物干しへ行った誰かが下りてくる様子なので、泣き顔を見られるのが厭に、人気のない父の書斎へ、僕は入ってしまった。いつも父の坐る大ぶりの椅子。そして、（ b ）見ると、卓の上には、胡桃を盛った皿が置いてある。胡桃の味などは、子供に縁のないものだ。

① すると、その椅子へ身を投げこむと、僕は胡桃を一つ取った。そして、冷たいナット・クラッカーへ挟んで、片手でハンドルを圧した。小さな掌へ、かろうじて納まったハンドルは、胡桃の固い殻の上をグリグリとこするだけで、手応えはない。「どうしても割って

やる」そんな気持ちで、僕はさらに右手の上を、左手で包み、膝の上で全身の力を籠めた。しかし、きやしゃな自分の力では、ビクともしない。僕はかんしゃくを起して、ナット・クラッカーを卓の上へ放りだした。クラッカーは胡桃の皿に激しく当たって、皿は割れた。そうするつもりは、さらになかったのだ。（ c ）して、椅子を立った。僕は二階へ駆け上り、勉強机にもたれてひとり泣いた。「 I 」その晩は、母の病室へも見舞いに行かずじまつた。

しかし、幸いなことには、母の病室は翌日から小康を得て、僕は日光へ遠足に行くことができた。襖をはらった宿屋の大広間にズラリと蒲団を引きつらねたその夜は、じつに賑やかだった。果しなくはしゃぐ子供たちの上の電燈は、八時ごろに消されたが、それでも、なかなか騒ぎは鎮まらなかった。③ いつまでも僕は寝つかれず、東京の家の事が思われてならなかった。やすらかな友だちの寝息が耳につき、覆いをした母の部屋の電燈が、まざまざと眼に浮んできたりした。「 II 」

静まり返った家の中で、僕の試験勉強はふたたび続いた。夜更けて、廊下を通ると、父の部屋から胡桃を割る音がよく聞かれた。看護の暇々に、父は書斎で読書しながら、胡桃をつまむのが癖になったようである。夜更けの廊下で、その音を聞くと、僕はその当座、（ d ）したものだ。皿を割ったことについて、父が一言もいわないだけに、いつそう僕は具合が悪かった。——そして、ふたたび僕は胡桃を割ってみようとはしなかった。僕には永久に割ることのできない堅さと思われたから。

年があらたまつて、僕は二つの中学の入学試験を受けた。母は、試験が終わつて間もなく、不帰の客となつた。父と姉と僕との生活が始まつた。父は、病む母へ向けた慈愛を、そして、母への追慕の情を、二人の上に惜しみなく注いだ。

母の死後、半年ほどすると、姉に縁談が起つた。姉も好意を持っていた人で、話はすぐきまり、挙式は一周忌がすんでから、ということになつた。^④自分の姉でしかなかつた姉を、僕はあらたまつた気持ちで、見なおすのであつた。兄となるべき人も、家へ遊びに来るようになつて、三度に一度は、僕を加えた三人で、郊外へ散歩に行つたり、映画を観に出かけることもあつた。その人と二人でいる時は、僕はその人に好意を持ったが、姉が加わると、心の底にきつと沸いてくる、悲しさに似た感情を、僕はどうにもできずにいた。

「 III 」

ある日曜日の午後であつたと思う、僕は姉と親戚へ行つた。その帰り路に、姉が何気ない風に言つた。「あたし、節ちゃんに相談があるの。——鶴沼の、桂おばさま、ね、知つてるでしよう?」「知つてるよ」桂おばさまというのは、死んだ母の遠縁に当る、母より二つ四つ若い、美しい人であつた。母が逗子で療養しているころ、つききりに看病をしてくれた人だ。結婚して二年ほどで、夫に死別された、ということはそのころから聞いていた。「桂さんに、あたしの代りに、家へ来ていただいたらと思つたの。お父様に話したら、節雄がよければ、つておっしゃるのよ」ドキンとした。みんな、自分を可愛がつてくれる人は行つてしまつて、お体裁に、代りの人を置いてゆこ

うとしてゐる。——そんな気もした。「僕、嫌だ」そういえば、桂さんはこのごろ、二三度家へ遊びに来てゐる。自分には何も言わず、みんなでそんなことを進行させていたに違ひない、——そんな風にも想像した。「このこと、あんまり突然だから、あなたには呑みこめないかもしれないけど、あたしがお嫁に行つてしまつたら、お父様だつてずいぶんお困りになるし……」「お父様は、勝手に旅行していればいいさ」僕はすげなく言いきつた。姉は淋しそうに、そのまま黙つた。

一周忌が近づくにつれ、姉の支度や親戚の出入りで、父も忙しうであつた。誰かしら人が来ていて、家は賑やかだつた。あれ以来、ひよいつと、桂さんのことを思い出すようになった。桂さんは、もの静かな、にこやかな人で、桂さんについて、僕は何の悪意も持つてゐるのではなかつた。「 IV 」

一周忌の前夜、坊さんが来て経をあげた。親戚の人が帰つてしまつと、父の書齋に親子三人が、久しぶりに卓を囲んでいた。「節雄、その戸棚からブランデーを取つてくれ。——信子は胡桃を」僕は細長い瓶を、そして姉は胡桃を、卓の上に置いた。「一年なんて、たつてしまえば早いもんだ。——これで、お姉さんが嫁に行くと、また当分、ちよつと淋しいな」父がやさしく僕に言つた。父の顔が老けて見えた。姉はブランデーを注いだ。「しかし、すぐまた馴れるさ」父はグラスを口にふくんだ。どうしたはずみか、桂さんのおもかげが、その時僕の眼に浮んできた。僕はちよつとあわてた。そして困つて、胡桃を一つ摘むと、クラッカーに挟んで片手で握りしめた。

すると、カチンと、快い音がして、胡桃は二つに綺麗きれいに割れた。思
いがけない、胸のすくような感触であった。その時、僕は言った。
⑦「お父さん。僕、桂さんに家へ来てもらいたいんだけど……」

(永井龍男「胡桃割り―ある少年に―」から)

問一 (a) から (d) に入る語の組み合わせと

して適当なものほどれか。

- ア 「a」ビクリと b ハツと c プツと d ヒョイツと」
イ 「a」ハツと b ヒョイツと c ビクリと d プツと」
ウ 「a」ヒョイツと b プツと c ビクリと d ハツと」
エ 「a」プツと b ヒョイツと c ハツと d ビクリと」

問二 ① どすんと、……胡桃を一つ取った。とあるが、その時の「僕」

の気持ちの説明として適当なものほどれか。

- ア 「僕」が旅行に行けないのに、書齋で優雅な時間を過ごしてい
る「父」の様子をうらやんでいる。
イ 「僕」が旅行に行くことをあきらめさせるために、わざと「母」
の病気を持ち出してくる「姉」の策略さくくりやくに怒りを覚えている。
ウ 級友たちとのいろいろな約束を破ることになってしまうこと
を思うと、皆に嫌われるのではないかと不安を感じている。
エ せっかく級友と旅行に行けることを楽しみにしていたのに、
それを奪おうとする「姉」にいらだっている。

問三 ② きゃしゃな、⑤ すげなくの本文中での意味の組み合わせとして
適当なものほどれか。

- ア 「②」弱々しい ⑤ 無愛想に」 イ 「②」上品な ⑤ 無秩序に」
ウ 「②」幼い ⑤ 無遠慮に」 エ 「②」育ちの良い ⑤ 無関心に」

問四 次の二文が入るところは、本文中の「Ⅰ」から「Ⅳ」
のどこか。適当なものを後から選べ。

僕は、ひそかに自分の性質を反省した。この反省は、僕の生涯
の最初のものであった。

- ア 「Ⅰ」 イ 「Ⅱ」 ウ 「Ⅲ」 エ 「Ⅳ」

問五 ③ いつまでも……ならなかった。とあるが、その理由して最
も適当なものほどれか。

- ア 級友とはしゃぐことで気分は晴れたが、家族の苦悩を少しも
理解しようとしなかった自分の性質が嫌になったから
イ 「父」や「姉」が旅行への参加を許してくれたことに対する感
謝の気持ちで、胸がいっぱいになったから
ウ 「母」の病気を思うと心から旅行を楽しめず、旅行に行けない
ことを恨んでふてくされていた自分を反省しているから
エ 東京に残っている家族のことを思い出し、東京に帰ったら
「母」の病室に見舞いに行かなくてはと焦りあせだしたから

問六

④ 自分の……見なおすのであった。とあるが、その説明として最も適当なものはどれか。

ア 縁談をきっかけに「姉」が一人の独立した女性として見えるようになったということ

イ 結婚を機に「姉」が「僕」を邪魔にするのではと疑うようになったということ

ウ 「姉」をいつの間にか「母」のような存在として見始めていたということ

エ すっかり大人びた「姉」の姿が他人のように見えるということ

問八

⑦ 「お父さん。……来てもらいたいんだけど……」とあるが、そのように「僕」が言った理由として最も適当なものはどれか。

ア 本当は「桂さん」にずっと来て欲しかったのに、強がってその本心を隠していた自分の幼さを恥じたから

イ 「母」に続いて「姉」までがいなくなることに對して、「父」自身も淋しさを感じていることを察したから

ウ 「母」や「姉」の代わりに家事をしてくれる人が「父」や「僕」には必要だから

エ 自分たち家族のことを気にかけてくれる「桂さん」の好意を無にすることは失礼だと思ったから

問七

⑥ 姉は淋しそうに、そのまま黙った。とあるが、その時の「姉」の気持ちの説明として適当でないものはどれか。

ア 「桂さん」が来ることに反対する弟に、どう接したらよいか分からず戸惑っている。

イ 「桂さん」が優しい人であることは知っているはずなのに、彼女を受け入れようとしないうちの気持ちを計りかねている。

ウ 「父」に対する反抗心をあらわにする弟にいらだちを隠せないでいる。

エ 思いのほか弟が怒りだしたので、気持ちが伝わらない悲しきを感じている。

問九

この作品の中の「胡桃」の役割として適当なものはどれか。

ア 「僕」が感情をぶつけて気を晴らすためのものであり、「僕」のかたくなな性格を擬人的に表現している。

イ 「僕」があこがれる未知の世界を象徴し、「僕」をはねつけることよって大人になることの難しさを表現している。

ウ 「父」のような逆らうことのできない絶対的な存在の象徴であり、それを割ることで親から自立していく姿を表現している。

エ 「父」に代表される大人の世界を暗示し、それを割る行為を通して「僕」が心身共に成長していくことを表現している。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「帝」は世の中の人々のぜいたくを禁止するために様々なきまりを定めた。しかし「左大臣」はこの命令を無視し、「帝」を怒らせ勘当されてしまう。

左大臣、いみじく驚き、かしこまりうけたまはりて、御隨身(從者ガ先導)の御先参るも制し給ひて、急ぎまかり出で給へば、御前どもあやし(中シヤゲルノモ)

と思ひけり。さて、本院(本邸ノ御門ヲ一ヶ月ホドモ閉ジサセテ)の御門一月ばかり鎖させて、出で給はず人などの参るにも、「勘当の重ければ」とて、会はせ給はざりしにこそ、世の過差はたひらぎたりしか。うちうちによくうけたまはりしかば、さてばかりぞしづまらむとて、帝と御心あはせさせ給へりけるとぞ。
(「大鏡」から)

(注) 御前||先に行く人たち

問一

(a) まかり出で、あやしの本文中での意味はそれぞれどれか。
(1) まかり出で

- ア 退出し
 - イ 邪魔をし
 - ウ 悪口を言い
 - エ 脱出し
 - エ 邪魔をし
 - イ 邪魔をし
 - イ 脱出し
- (2) あやし
- ア 粗末だ
 - イ もつともだ
 - ウ 面倒だ
 - エ 不審だ

問二 ① 出で給はず、の主語として適当なものとはどれか。

- ア 御隨身
- イ 御前ども
- ウ 左大臣
- エ 帝

問三 ② この後にかかる言葉の活用形はどれか。

- ア 連体形
- イ 已然形
- ウ 未然形
- エ 命令形

問四 ③ 世の過差はたひらぎたりしか。の意味として最も適当なものはどれか。

- ア 世間の人々に対する禁止令は撤廃された。
- イ 世間の人々はぜいたくをしないよう心がけるようになった。
- ウ 世間の人々はぜいたくすることをやめなかった。
- エ 世間の人々のぜいたくはおさまった。

問五 ④ さてばかりぞ……給へりけるの説明として適当なものはどれか。

- ア 左大臣は、自分が犠牲になれば世の中のぜいたくをおさめられるだろうと「帝」と打ち合わせていた。
- イ 左大臣は、世の中のぜいたくを厳しくとりしまりすぎるとますます世間の反感を買うだけだと「帝」に忠告していた。
- ウ 左大臣は、世の中のぜいたくをどのようにすればおさえることができるかと「帝」と細かく相談し合った。
- エ 左大臣は、どんな政策を行っても世の中のぜいたくはおさまらないと「帝」と嘆き合った。

四

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

英語で「フアイブ・オクロック・シャドウ」と言う。訳すと「午後五時の影」、と言っても夕日に伸びる影ではない。会社の引け時になると、朝に剃ったヒゲが伸びて男の顔にうつすら影を作る。その、かすかな鬚りのことだ。▼そんなふうには象徴的に「九時から五時まで」と言われる働き方が、この夏、様変わりしつつある。始業と終業を早めるサマータイムを取り入れる企業が、じわり広まっている。▼「短夜」「明易し」といった季語さながらに、夏の朝は五時には明るい。天然の照明と朝の冷気を無駄にするのは、思えばもったいない。夏時間を当て込んでの「アフター4商戦」も熱を帯びてきた。▼夕刻の余暇利用も利点とされる。習い事、スポーツジム、家族とのひととき。「朝早いのはつらいけど、この一時間は貴重です」という声を記事が伝えていた。小紙の調査によれば、主要企業の導入機運はかつてなく高いという。▼国の制度としての **1** は賛否を二分してきた。反対論の一つに、残業があった。日が高くては帰れない。長く働かされるだけだ、と。だがこの夏は電気不足で、いわば早上がりのための措置だ。横並びで居残る企業文化を変える契機になるだろうか。▼楽観主義者はドーナツを見るが、 **2** 主義者はドーナツの穴を見るのだそうだ。不足を嘆かず、ある電気を賢く使いながら暮らしや価値観を変えていきたい。思えば得難いチャンスである。

(朝日新聞「天声人語」から)

問一 余暇、措置、契機の読みをひらがなで書きなさい。

問二 じわりのように物事の状態を表す言葉を何と呼ぶか。解答欄の「く語」に続くように漢字で答えなさい。

問三 季語を用いて作る伝統的な定型短詩を何というか。漢字で答えなさい。

問四 **1** に入る言葉を、本文中から抜き出しなさい。

問五 **2** に入る楽観の対義語を漢字で答えなさい。

問六 **4** ながらの品詞名を漢字で答えなさい。

